

子どもにとっては地元だから ～そして、つなげた14年～



新田学区連合町内会SBL（せんだい地域防災リーダー）協議会会長
新田 mama*café 、つなげる子育て～えん～ 言いだしっぺ代表
眞野 美加

宮城野区新田でフルタイムで働きながら育児をするお母さんで、夫婦ともに仙台市外の生まれです。

震災前に立ち上げたママとシネマ実行委員会は、乳幼児の母として感じていた違和感や、いずさを同じ母親で払拭しながら楽しみをつくる為に、育児サークルは、地域の中に挨拶できる人がいないことへの危惧感から始めました。

震災時は、まずは自分以外のことに必死になるしかなく、泣くことさえ忘れていましたが、再会した代表理事の齋藤純子さんは、嗚咽を漏らしながら話す私をひたすら受け止めた後、「その経験さえも、きっと役に立つもの」と、鼓舞してくださいました。その言葉通り、コロナ禍で活動に悩んでいる育児サークルを支える～えん～という活動を、あの時の活動困難期を乗り越えた数団体とともにチームを作って行っています。

震災を機に「この子が一人で通学路を歩く日が、あつという間にくる。その時、この子を守ってくれる地域なのだろうか」と考えるようになりました。学生時代、阪神淡路大震災のボランティアに参加したものの、311では何もできなかった後悔から、防災を学び、女性視点を活かした避難所づくり活動を始めました。ありがたいことに、仙台市の派遣団としてノルウェー視察研修へ参加、多くの出会いと学びを深めることもできました。そして、その様子をテレビでご覧になった橘川連合町内会長に数年後、お声がけいただくことに繋がったわけです。

PTAに嫌悪感をもっていた私は、経験や出会いによって価値観が変わり、今は中学校のPTA会長を務めています。当事者活動、子育て支援、地域防災を経て、やはり学校との協働や連携、相互理解が不可欠だ、といきつきました。

子どもたちが学校で「何をどんな言葉で学んで

いるか」を知ることで、地域に共通言語が生まれ、同じことを色んな大人が言う=大切なことと理解してもらえるのではないかな、と感じていますし、保護者として、地域住民として大切にしたいことについて直接の意見交換ができるというのも、非常に重要な点だと思います。

さらに、役員活動を通して「ゆるやかな大人の繋がり」ができることで、ちょっと立ち話で解決できることはたくさんあります。コロナ禍で、集まることが叶わない中、在宅勤務も増えた私も「楽かも」と思っていました。文字だけのコミュニケーションの難しさを実感した場面に多々遭遇しました。本来のPTAの姿が見えにくくなっている時代ですが、学校・保護者・地域と繋がることで安心感が増えるのは、子どもたちの為におさまらず、それが私たち保護者の為になっていることに立ち返っていきたく活動しています。

6年前、この巻頭文へ寄稿した際に『多様な人、世代がちょうどよく関わり合い、互いを見守りあえる地域に暮らすこと』を目標としていましたが、未熟ながら多くの役割をいただいた今、地域の各組織の通訳者として、経験を活かした地域内外とのパイプ役として、暮らしたい地域を自分たちで作る、その仲間と、見守ってくださる地域内外のレジェンドたちにも恵まれているので、各々の強みを活かしながら、手を取り合って「子どもたちにとっての地元」を安全で魅力溢れるまちにしていきたいと思っています。

